

ふじ ばたけ
藤 畑 遺 跡

—— 平成9年度発掘調査報告書 ——

1998. 3

岩手県宮古市教育委員会

藤 畑 遺 跡

—平成9年度発掘調査報告書—



藤畑遺跡全景（航空写真）

1998. 3

岩手県宮古市教育委員会

The Miyako Board of Education Miyako, Iwate, Japan

序 文

宮古市内には、私たちの先人たちが残した数多くの遺跡があります。これらの貴重な文化遺産を正しい理解のもとに保護し、後世へ伝えていくことは、私たちに課せられた重大な責務と考えております。

市の南部、宮古湾最奥部に位置する津軽石地区は、サケの遡上する川として著名な津軽石川のあるまちとして知られています。この津軽石地区には、昭和57年度に実施した遺跡分布調査で奈良・平安時代にかけての古代の遺跡が多いことが確認されてきました。

さて、本書は、墓地造成工事に先立ち実施した藤畑遺跡の緊急発掘調査の内容を取りまとめたものです。

調査の結果、奈良時代後半の竪穴住居跡、鍛冶炉と思われる炉跡などが見つかりました。当遺跡の内容を把握した初めての調査で、古代、特に奈良時代の鉄を巡る問題を考えていく上では重要な遺跡のひとつであることがわかってきました。

本書が、遺跡の保護・活用と理解のために、研究者のみならず、多くの方々に少しでも役立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の作成に際しまして、多くの方々のご協力・ご支援を賜りました。心から感謝申し上げ序文といたします。

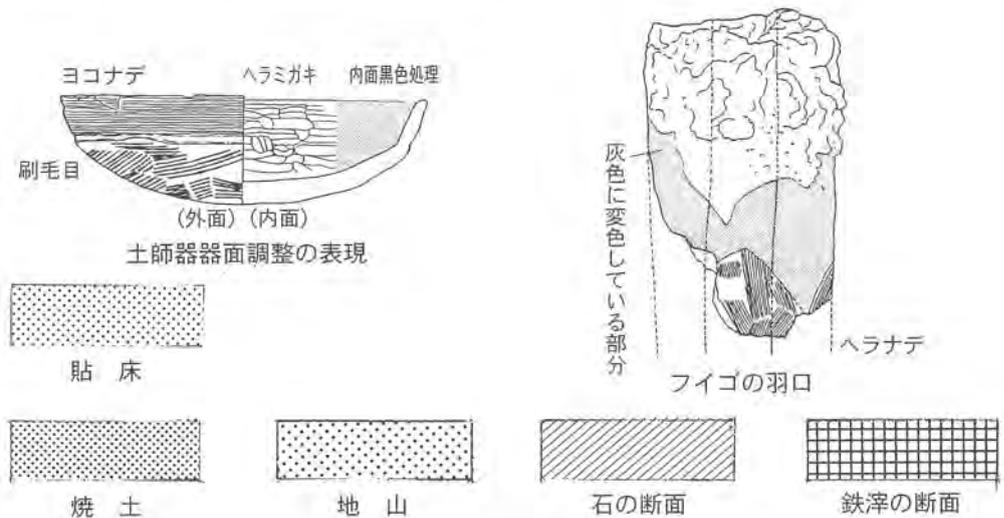
平成10年3月

宮古市教育委員会

教育長 中 屋 定 基

例 言

1. 本書は、平成9年度に実施した藤畑遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、墓地造成工事の実施に先立ち、宗教法人瑞雲寺代表役員斎藤泰純氏より依頼を受けて宮古市教育委員会（教育長 中屋定基）が主体となって実施した。
3. 発掘調査及び本書の執筆・編集は工藤・鎌田が担当し、竹下、高橋、加納、阿部がこれを補佐した。
4. 調査の座標は調査区にあわせ任意に設定したもので、調査区北東側の地境杭をNSEW0とし東西南北に1m移動するごとにN1、S1、E1、W1・・・と表記した。なお、調査座標は磁北よりN54°Wである。
5. 高さは標高基準点より移動しそのまま使用した。
6. 土層の観察には『新版 標準土色帖』（1967 小山正忠・竹原秀雄編）を参考とした。本文中に記載した土層観察表のうち備考は土の硬さ、しまり、その他混入物の順で記述した。
7. 遺構・遺物の表現は次のとおりとした。



8. 本文中における引用文献は次のとおり略記した。（いずれも宮古市教育委員会刊行）
 - 1986 『宮古市遺跡分布図 昭和63年度版』 武田 将男 → 『分布図 86』
 - 1983-86 『宮古市遺跡分布調査報告書 1～4』 武田 将男 → 『分布調査 1～4』
 - 1984 『赤前遺跡群 第1次・2次発掘調査報告書』 武田 将男 → 『赤前報文 84』
 - 1991 『払川I遺跡-平成2年度発掘調査報告書-』 朴澤正耕外 → 『払川I 91』
 - 1995 『赤前I牛子沢遺跡-平成4年度発掘調査報告書-』 鎌田祐二 → 『赤前I牛子沢 95』
 - 1992 『鯉沢遺跡-平成2年度発掘調査報告書-』 鎌田祐二、阿部 豊 → 『鯉沢 92』
 - 1993 『萩沢II遺跡-平成4年度発掘調査報告書-』 阿部 豊 → 『萩沢II 93』

目 次

序 文

例 言

目 次

I 調査経過

1. 調査に至る経過 1
2. 調査要旨 1
3. 調査体制 1

II 遺跡をとりまく環境 2

III 調査の結果

1. 調査の状況 6
2. 基本層序 6
3. 検出した遺構と遺物 9
4. 遺構外出土遺物 16

IV 調査のまとめと考察

1. 遺構について 19
2. 遺物について 19

報告書抄録 20

写真図版

挿 図 目 次

第1図	位置図	3
第2図	藤畑遺跡周辺遺跡分布図	4
第3図	藤畑遺跡周辺地形図	5
第4図	調査区全体図	7、8
第5図	竪穴住居跡全体図	11
第6図	竪穴住居跡カマド跡	12
第7図	竪穴住居跡床面ピット断面図、貼床下土坑跡	13
第8図	第1号炉跡	14
第9図	第1号、第2号土坑跡	16
第10図	出土遺物①	17
第11図	出土遺物②	18

写 真 図 版 目 次

中表紙	藤畑遺跡全景（航空写真）
第1写真図版	調査前の現況、調査区全景
第2写真図版	竪穴住居跡検出状況、竪穴住居跡完掘
第3写真図版	竪穴住居跡土層断面（北側）、竪穴住居跡土層断面（南側）
第4写真図版	竪穴住居跡カマド検出状況、竪穴住居跡カマド断面（東側）
第5写真図版	竪穴住居跡カマド煙道断面、竪穴住居跡カマド出土土器内部礫出土状況
第6写真図版	竪穴住居跡カマド完掘、第1号炉跡断面
第7写真図版	竪穴住居跡カマド周辺出土遺物
第8写真図版	鉄滓廃棄層出土ファイゴの羽口、及び遺構外出土遺物他

付 表 目 次

第1表	津軽石地区遺跡発掘調査一覧表	2
第2表	基本層序土層観察表	7、8
第3表	竪穴住居跡土層観察表	10
第4表	竪穴住居跡カマド土層観察表	12
第5表	竪穴住居跡床面ピット、貼床下土坑跡土層観察表	13
第6表	第1号炉跡土層観察表	15
第7表	鉄滓分析一覧表	15
第8表	第1号、第2号土坑跡土層観察表	15

I 調査経過

1. 調査に至る経過

藤畑遺跡は、宮古市大字津軽石第12地割字藤畑地内に所在する周知の遺跡で、宮古市遺跡コードLG53-2346、岩手県遺跡コードLG53-2357として登録されている(『分布図 86』)。

今回の発掘調査は、宗教法人瑞雲寺代表役員斎藤泰純氏より藤畑遺跡内の字藤畑地内32番地3に墓地を造成したいという申請書が提出されたことを発端とする。この後、宮古市教育委員会は申請者と事前の協議を重ね、墓地造成事業前に範囲内の遺構・遺物の有無とその内容確認のための試掘調査を実施することとし、その結果をもとにその後のことについて協議することで合意が得られた。申請者は、平成9年7月18日付けで発掘届を提出し、宮古市教育委員会は同年7月25日付けで申請者と試掘調査に関する協定を締結し、同年7月28日から試掘調査を実施した。試掘調査の結果、多量の鉄滓や竪穴住居跡と考えられる生活面、鉄製品などの遺構・遺物が確認された。これを踏まえ、再度、申請者と協議を行った結果、記録保存を前提とした緊急の発掘調査を引き続き実施することで両者の合意が得られ、同年9月4日付で再度協定を締結し、同年9月8日から本調査を実施した。

周知の遺跡

事前協議
試掘調査

記録保存

2. 調査要旨

調査地点	宮古市大字津軽石第12地割字藤畑32番地3
調査原因	墓地造成工事
調査期間	試掘調査 平成9年7月28日～平成9年7月31日 本調査 平成9年9月8日～平成9年10月9日 室内整理 平成10年1月5日～平成10年3月17日
調査面積	調査対象面積159㎡のうち120㎡
検出遺構	奈良時代の竪穴住居跡1棟、鍛冶炉跡?1基、鉄滓廃棄層、土坑跡2基
検出遺物	奈良時代の土師器、土製紡錘車、鉄製品、羽口、鉄滓のほか、縄文土器など

調査要旨

3. 調査体制

発掘調査の体制は、次のとおりである。

調査主体	宮古市教育委員会(教育長 中屋定基)
調査総括	宮古市教育委員会社会教育課長 浦野 光廣
事務担当	宮古市教育委員会社会教育係長 田鎖 春雄 宮古市教育委員会社会教育主事 野崎 政博
調査員	宮古市教育委員会社会教育係主任 竹下 将男 同 高橋憲太郎 同 鎌田 祐二 同 主事 加納 由美 同 埋蔵文化財調査員 阿部 豊 同 埋蔵文化財調査員 工藤 剛司(主担当)

調査体制

発掘調査及び整理作業にあたり、次の方々から多大なご協力をいただいた（敬称略）。

《地権者》 館下平蔵

《発掘調査》中居磯雄、佐々木力、佐野利男、北村忠治、佐々木茂実、小成裕信、北村茂樹

《整理作業》工藤イネ

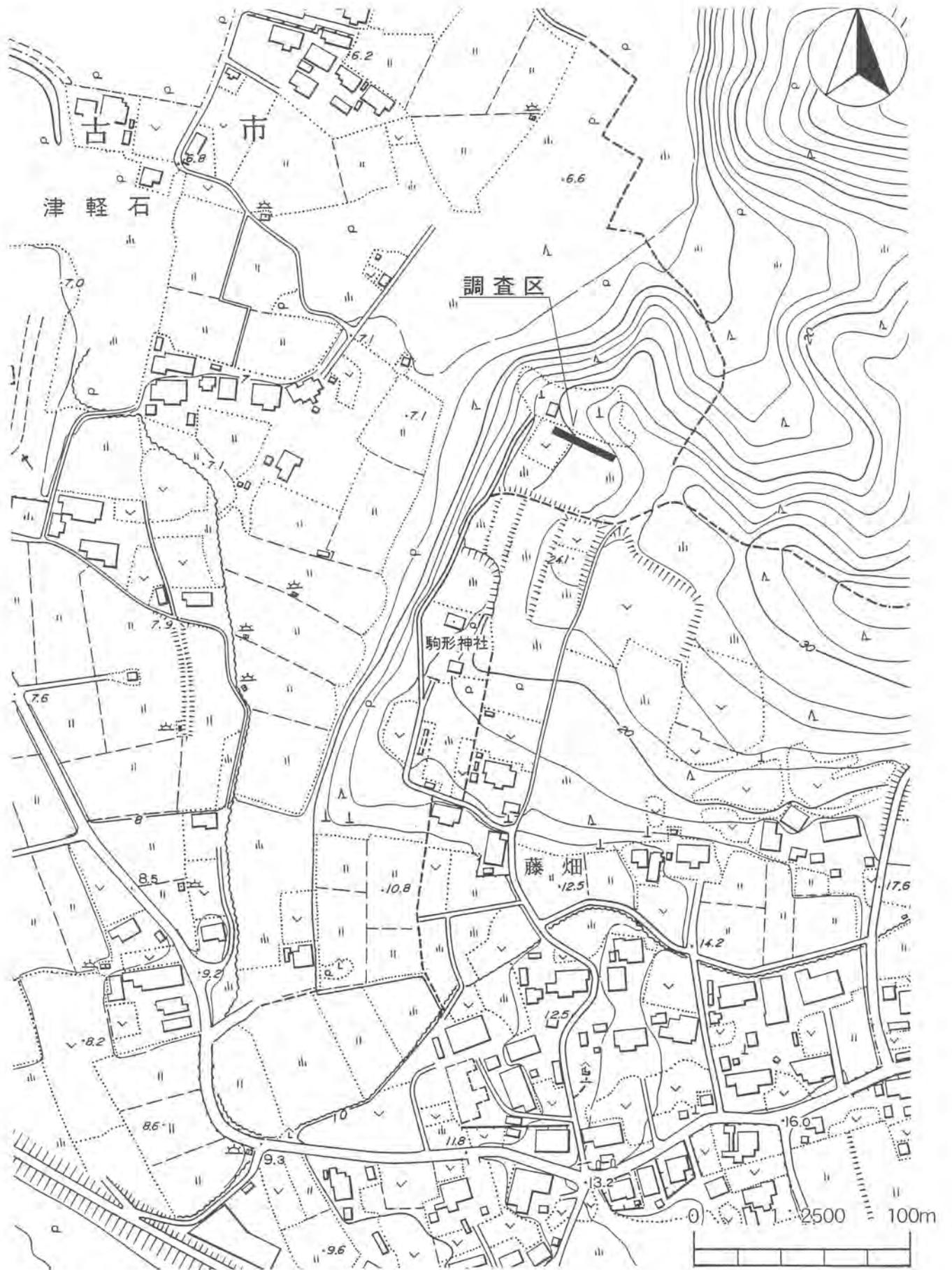
II 遺跡をとりまく環境（第1図、第2図）

宮古市は岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、北緯39° 29′ 23″～39° 43′ 20″，東経141° 45′ 20″～142° 04′ 44″までの約339km²を市域としている。市内東部の重茂半島とよ鉾ヶ崎は本州最東端に位置する。藤畑遺跡を含む津軽石地区は、北東方向に突き出た重茂半島に囲まれた奥行き約10km程の宮古湾の最奥部、市の南部にあたる。当地区は、北流する津軽石川により東西に分断され、その氾濫平野に市街地が形成されている。遺跡の多くは、標高50m前後の丘陵（豊間根丘陵）や扇状地上に立地している。基盤岩は花崗岩で津軽石川から宮古湾の西縁沿いに走る津軽石断層帯により、東部の大浦花崗岩体と西部の宮古花崗岩体にわかれる接触部にあたる。藤畑遺跡は、津軽石川の東部に位置し豊間根丘陵の末端部に立地する。当遺跡の西側には津軽石川の氾濫平野が広がり、東側は山地帯、南側には扇状地が広がっている。宮古湾の最奥部、津軽石川河口部までは約4km程である。

藤畑遺跡の周辺には、北側には赤前遺跡群が形成されており、川を挟んで西側にも遺跡が分布する。昭和50年代半ばには学校建設、最近では道路建設に関連し、赤前遺跡群を南北に貫くように多くの遺跡の発掘調査が実施され、奈良・平安時代の集落などが調査されている。一方、川を挟んで西側では、平成2年に養護老人ホーム改築に伴って弘川I遺跡の、また平成9年には個人住宅建築に伴って沼里遺跡の発掘調査が実施されている。それぞれの調査内容をまとめたのが次の一覧表である。

No	遺跡名	調査年度	調査担当	調査原因	調査成果	報告書等
1	赤前IV八枚田	昭和54年	武田将男	学校建設	平安竪穴住居跡3棟、縄文早期遺物包含層	「赤前報文 84」
2	赤前Ⅲ	昭和57年	武田将男	宅地造成	建物跡、土坑跡、平安竪穴住居跡2棟外	「赤前報文 84」
3	赤前I牛子沢	昭和59年	武田将男	個人住宅	竪穴1棟、中世陶磁器片等	未報告
4	弘川I	平成2年	朴澤正耕外	養護老人ホーム	奈良竪穴住居跡3、掘立柱建物1、縄文陥穴等	「弘川報文 91」
5	赤前I牛子沢	平成4年	鎌田祐二	個人住宅	土坑跡、縄文中期包含層、陶磁器片等	「赤前I牛子沢 95」
6	小堀内Ⅲ	平成5年	阿部 豊	道路建設	縄文～近世遺物包含層	平成10年度刊行予定
7	赤前IV釜ヶ沢	平成5年	阿部 豊	道路建設	近世遺物包含層	平成10年度刊行予定
8	小堀内Ⅲ	平成6年	阿部 豊	道路建設	奈良・平安竪穴住居跡6、鍛冶炉等	平成10年度刊行予定
9	赤前V柳沢	平成6年	阿部 豊	道路建設	遺物包含層等	平成10年度刊行予定
10	赤前IV,V	平成7年	阿部 豊	道路建設	縄文・弥生・奈良・平安竪穴住居跡12、製鉄炉等	平成10年度刊行予定
11	赤前Ⅲ	平成9年	阿部 豊	道路建設	平安竪穴住居跡3、製鉄・鍛冶炉、縄文前期竪穴等	平成10年度刊行予定
12	沼里	平成9年	阿部 豊	個人住宅	平安鍛冶炉、縄文陥穴等	未報告

第1表 津軽石地区遺跡発掘調査一覧表



第3図 藤畑遺跡周辺地形図

概して、当地区では奈良・平安時代の古代の遺跡が多く、また、鉄に関連した遺構・遺物の検出が目立っている。このことは、昭和57年度から4年間実施した市内遺跡詳細分布調査の結果からも指摘されていたものである。（『分布調査 1～4』）

Ⅲ 調査の結果

1. 調査の状況（第3図）

現況

今回の調査地点は、遺跡内でも西端部に位置し、西側にひらけた標高約21mの洞状地形の一面で、南、北、東側を標高約24mほどの尾根状の台地に囲まれている。津軽石川の氾濫平野との標高差は約12mである。現況は畑で西方向に傾斜している平坦面である。調査地点の北側は墓地となっており、人工的な改変を受けている。調査対象区域は、東西が約40m、南北が約4mのトレンチ状で、現状保存とした駐車場部分を除く東西約30mの範囲で調査を行った。調査対象区域が限られていたこともあり竪穴住居跡などの遺構の全貌を明らかにすることができなかった。

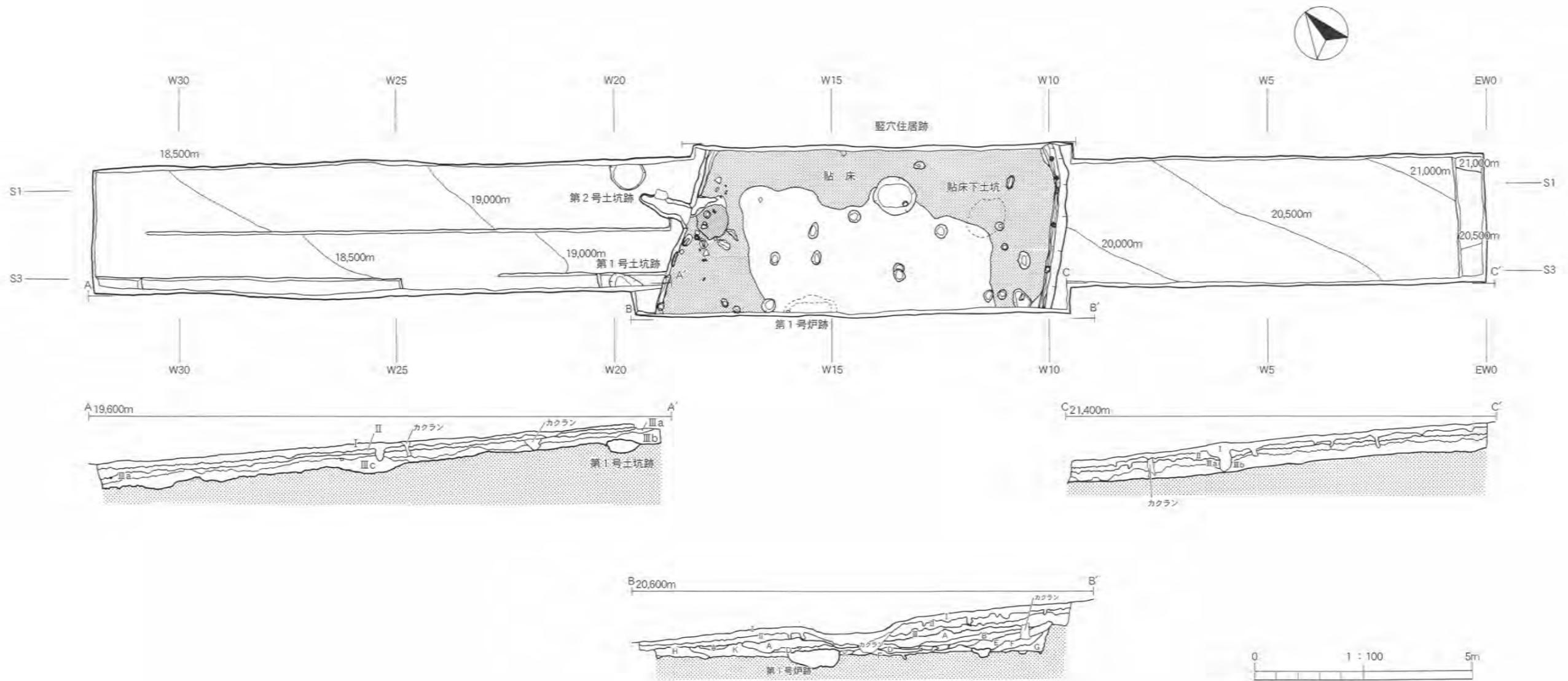
2. 基本層序（第4図）

基本層序

今回の調査区内の基本層序は次のとおりである。

- I層 畑の耕作土、表土層である。暗褐色土を基本土とし黒褐色土塊が混入する。柔らかく、しまりがない。
- II層 表土直下の黒褐色土層で暗褐色土や褐色土が粒状から小塊状に多量に混入する。硬さは中程度でややしまっている。鉄滓や炭化物片が含まれる。II層を剥いた段階で遺構を検出した。
- III層 黒褐色土を基本とする粘性のある層で竪穴中央から西壁の間で途切れ、また調査区の北側では確認できない。3層に細分される。
 - III a層 褐色土塊、黒色土塊を混入する。硬さ、しまりとも中程度である。
 - III b層 III a層より暗く粘性のある黄褐色土塊が少量混入する。硬さ、しまりとも中程度である。
 - III c層 III層中最も明るい層で調査区の西端部に堆積する。若干の縄文土器片が含まれる。
- IV層 暗褐色を基本とする層で下層の地山層のV層土を塊状に多量に含む漸移層である。やや柔らかいが比較的しまっている。
- V層 花崗岩の風化土層で地山とした層である。褐色から黄褐色土を基本としている。比較的硬くしまっている。この層を掘りこんで竪穴住居跡が作られている。
- VII層 花崗岩の基盤岩で調査区の北から南、東から西側に傾斜している。竪穴住居構築時にこの傾斜が床面に影響を与えたために、一度掘った竪穴を埋め戻し更に貼床を施したものと考えられる。

以上が基本層序であるが、竪穴住居跡はIV層からV層を掘りこみ作られている。また、この竪穴住居跡が廃棄されて間もなく、炉跡が竪穴住居跡の床面下まで掘りこんで構築されている。土坑跡はIV層上面で検出した。



第4図 調査区全体図

層名	基本土	混入土	備考
表土 Ⅰ	10YR3/3砂質埴土	10YR2/3砂質埴土塊状5%、10YR3/4砂質埴土塊状3%	軟、疎、現耕作土。
自然堆積 Ⅱ	10YR2/3砂質埴土	10YR3/3砂質埴土塊状20%、10YR4/4砂質埴土塊状15% 10YR3/4砂質埴土塊状5%	中～軟、中
自然堆積 Ⅲa	10YR3/3砂質埴土(粘質土)	10YR3/4砂質埴土塊状10%、10YR2/2砂質埴土塊状5% 10YR4/4砂質埴土塊状20%	中、中、炭化物片微量含む。
自然堆積 Ⅲb	10YR3/8砂質埴土	10YR4/6砂質埴土塊状20%、10YR5/8砂質埴土塊状10%	中、中、炭化物片微量含む。
自然堆積 Ⅲc	10YR3/4砂質埴土	10YR4/4砂質埴土塊状7%、10YR3/3砂質埴土塊状3% 10YR4/6(明)砂質埴土塊状10%	中、中～蜜、炭化物片微量含む。
地山 Ⅳ	10YR3/4砂質埴土	10YR3/3砂質埴土塊状5%、10YR4/6砂質埴土塊状30% 10YR6/8砂質埴土塊状3%	中～軟、中～蜜、地山漸移層
地山 Ⅴ	10YR4/6(明)砂質埴土	10YR4/4砂質埴土塊状2%、10YR5/8砂質埴土塊状7%	中、中～蜜、地山層
地山 Ⅵ	10YR5/8砂質埴土		硬、蜜、基盤層(花崗岩)

第2表 基本層序土層観察表

3. 検出した遺構と遺物

竪穴住居跡（第5～7図）

調査区のほぼ中央部に位置する。北壁と南壁側は調査区外となり全容は不明である。

平面形は北東側の壁が内側に回り込みはじめていることから、隅丸方形を呈するものと推定される。規模は東西方向で8.5m、南北方向で3.9m以上をはかる。

埋土はA層からH層、K層の9層に大別され細別層も含め土層注記表に記した。堆積状況を見ると、この住居が廃絶され床面全体を覆うくらいの東壁と西壁側からの自然堆積があり（C層、E～H層、K層）、竪穴中央部に窪みを残すような状態、この段階で東壁側に小土坑跡（土層断面観察時に確認、F層堆積後に掘られている）と第1号炉が作られ鉄に関する何らかの作業が行われている。そして、この第1号炉跡を覆うように鉄滓を多量に廃棄した人為的なD層（鉄滓廃棄層）が堆積し鉄に関連した何らかの作業が再び行われている。更に、上部には鉄滓を含むA層、B層が堆積しており、繰り返して鉄に関連した作業が行われていたことが推測される。それら鉄滓についての重量等の分析は15ページに一覧表を掲載している。

床面は竪穴中央部を除く壁側全域に貼床されている（VI a層）。貼床は北側のほうがより硬くしまっており、花崗岩の風化礫と思われる白色の砂礫粒が混入している。貼床の下には竪穴構築土が埋め戻されている（VII層）。これは、竪穴構築時に谷筋に傾斜する南西側から掘り始めたが北側に進むに従い、硬い基盤岩（VIII層）にあたり当初の床面を構築しようとした面にかんりの落差が生じたため、北側の面に合わせるために土を埋め戻し貼床をし生活面にした作業工程が推測される。よって、構築土も南西側のほうが厚い。床面上にはP1からP20まで検出したが、P20以外はいずれも小規模、あるいは浅いもので柱穴に相当するものとは考えられない。P20は床面からの深さ0.75mをはかるが、竪穴の上屋構造にかかわるものかは不明である。支柱穴は調査区外に存在するものと推測される。また、床面の貼床を剥いだ段階で土坑跡1基を検出している。1m×0.8mをはかる楕円形状の浅い土坑である（第7図）。遺物は出土していない。

カマドは西壁のほぼ中央部に位置するものと思われ、燃焼部には径約0.8mほどの範囲で焼土がみられ、焚き口は床面より一段低く掘りくぼめられており焼土厚0.1mをはかる。火焼面下の土はかなり脆くなっていた。袖には芯材として礫を使用したと考えられる小穴が検出され、それらを固定するための黄褐色土の構築土が両袖に残っていた。煙道は1.5mほどの長さで底面はやや上り傾斜である。

遺物はカマド周辺と内部から土師器、鉄製品、土製紡錘車、貝殻の表皮などが出土している。第10図1は土師器坏でカマド内に口縁部を下にして第10図2の土師器甕と並んだ状態で出土しているが、どちらも底部を上にし内部には礫が入っていた。どちらも土器の一部に2次的な焼成を受けている。1の坏はほぼ完形品でロクロ未使用で内面黒色処理を施したもので、丸底の底部から段、沈線を有し口縁部は直立気味に立ち上がる。外面底部は刷毛目、体部から口縁部はヨコナデ、内面はヘラミガキの器面調整が施されている。口径13.8cm、器高4.1cmをはかる。2の甕はロクロ未使用で底部から体部にかけてのもので、底部端部が張り出し体部は外傾

平面形
規模
埋土

鉄滓廃棄層

床面、貼床

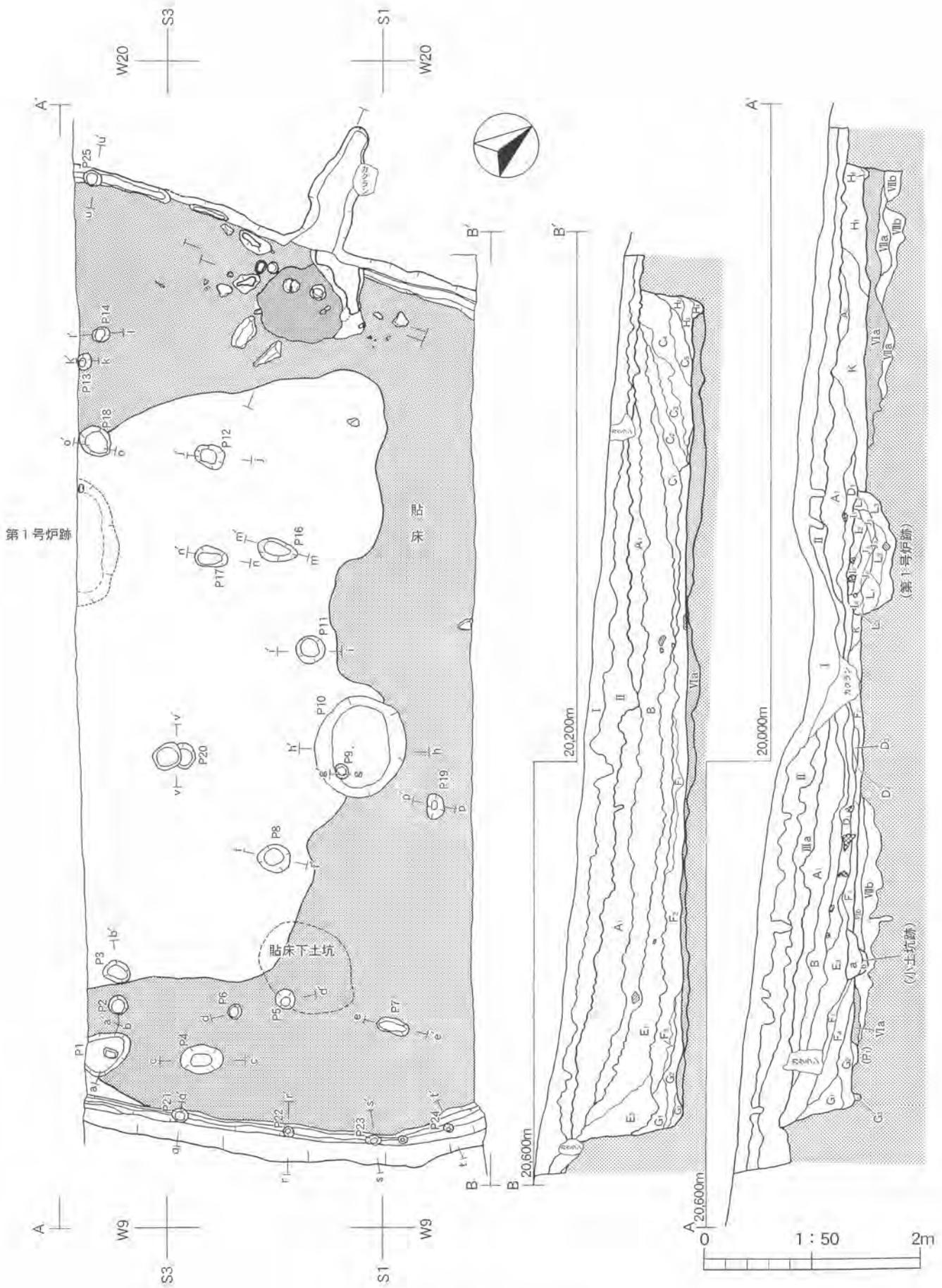
カマド

遺物

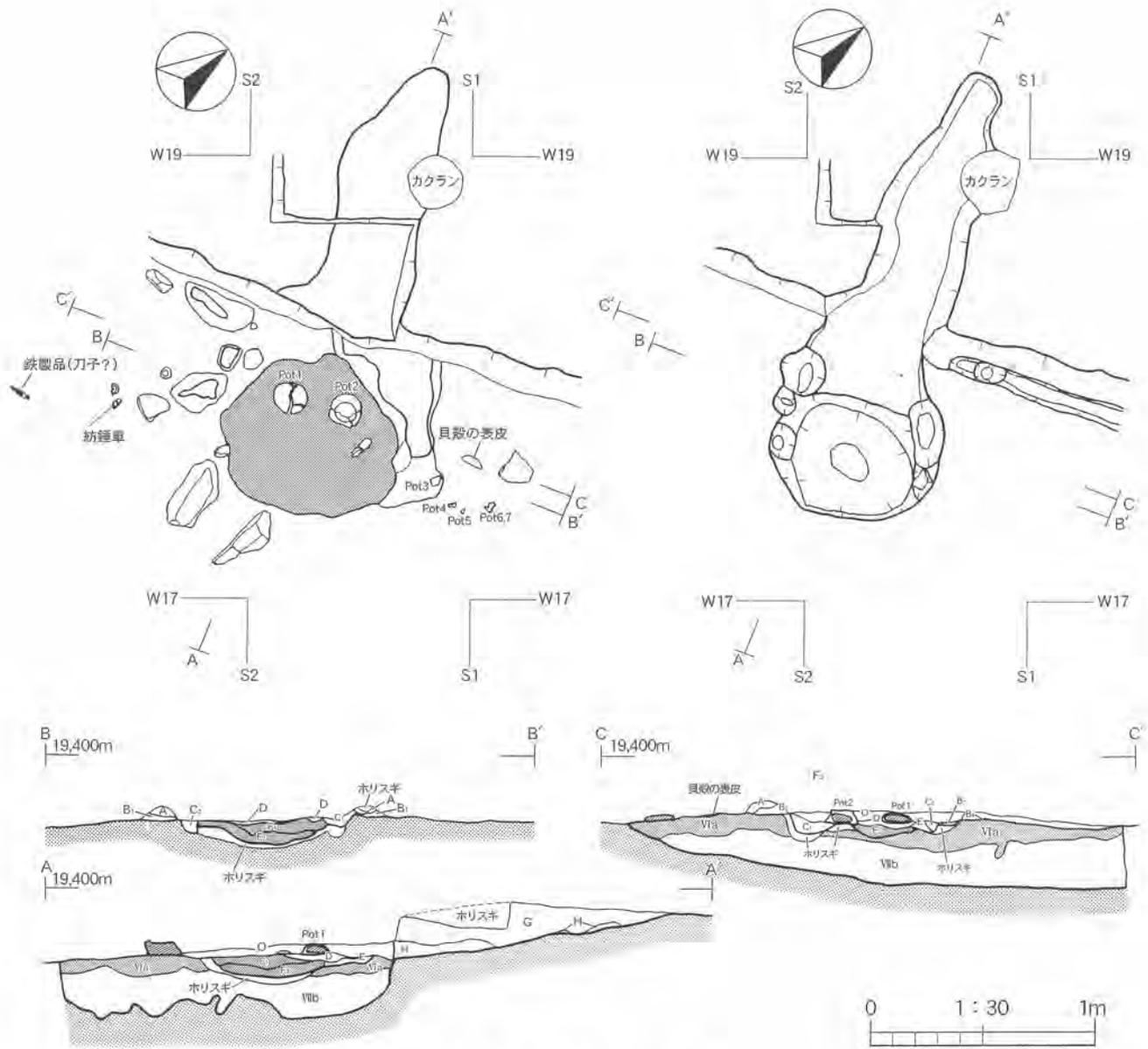
気味に立ち上がる。外面底部の張り出し部は横方向の強いヘラナデ調整がされ、体部の内外面には刷毛目調整が施されている。また、底面には木葉痕がみられるが縁辺部はヘラナデ調整されている。底径9.6cmをはかる。この外に図示できなかつたが、カマド北脇の床面から1と同様の坏の破片が5点出土している。3はカマドの南脇の床面から出土した土製紡錘車である。平面形は円形で中央に貫通孔をもち、断面形は等脚台形で中心の上部が窪んでいる。孔径は0.8cm、重量47.1gをはかる。僅かにヨコナデ調整がみられる。4は土製紡錘車とほぼ同じところから出土した刀子と思われる鉄製品で残存長9.9cmをはかるものである。錆化が著しく形状は不明だが、柄には木質部が付着している。柄は刃部の背に対してやや角度をもつようにつけられているが、柄の中茎は原形をとどめており背側では水平、腹側では背に向かって細くなる。刃部は断面三角形で残存長4.8cmである。そのほかとして、カマド北脇の床面上にイガイと思われる貝殻の表皮が出土している（第7写真図版）。また、埋土下部から第11図10の縄文土器片が1点出土している。

層名	基本土	混入土	備考
埋土 A1	10YR2/2(暗)赤質粘土	10YR2/1(赤)質粘土塊状5%、10YR2/3(赤)質粘土塊状10%、10YR3/3(赤)質粘土塊状15%	軟、中～硬、炭化物粒少量含む、鉄滓多量に含む。
埋土 A2	10YR2/2(明)赤質粘土	10YR3/3(赤)質粘土塊状15%、10YR3/4(赤)質粘土塊状15%	中、中～硬、炭化物粒微量含む
埋土 B	10YR2/2(明)赤質粘土	10YR2/3(赤)質粘土塊状30%、10YR3/3(赤)質粘土塊状15%	軟、硬、炭化物片少量含む、鉄滓多量に含む。
埋土 D1	10YR2/2(赤)質粘土	10YR3/3(赤)質粘土塊状15%	軟、硬、鉄滓多量、炭化物片中量、焼土粒少量含む
埋土 D2	10YR2/1(赤)質粘土	10YR2/2(赤)質粘土塊状10%、10YR2/3(赤)質粘土塊状5%	軟、硬、炭化物片中～多量含む
埋土 D3	10YR3/4(赤)質粘土	10YR4/4(赤)質粘土塊状5%、10YR3/3(赤)質粘土塊状20%	軟、硬、炭化物片少量含む
埋土 C1	10YR2/3(暗)赤質粘土	10YR2/2(赤)質粘土塊状15%、10YR3/3(赤)質粘土塊状10%	軟、硬、炭化物片少量含む
埋土 C2	10YR2/3(明)赤質粘土	10YR2/2(赤)質粘土塊状10%、10YR3/3(赤)質粘土塊状20%、10YR3/4(赤)質粘土塊状10%	中～軟、硬、炭化物片少量含む
埋土 C3	10YR2/2(赤)質粘土	10YR2/3(赤)質粘土塊状10%、10YR3/3(赤)質粘土塊状5%	中～軟、中～硬、炭化物片微量
埋土 C4	10YR2/3(赤)質粘土	10YR2/2(赤)質粘土塊状5%、10YR3/3(赤)質粘土塊状30%、10YR4/4(赤)質粘土粒状15%	中～軟、硬、炭化物片少量含む
埋土 C5	10YR2/2(赤)質粘土	10YR2/3(赤)質粘土塊状15%、10YR3/3(赤)質粘土塊状5%、10YR3/4(赤)質粘土塊状5%	軟、硬、炭化物片微量含む
埋土 E1	10YR3/3(赤)質粘土	10YR3/4(赤)質粘土塊状20%、10YR2/3(赤)質粘土塊状10%、10YR4/4(赤)質粘土塊状3%	軟、硬、炭化物片・焼土粒少量含む
埋土 E2	10YR3/3(赤)質粘土	10YR3/4(赤)質粘土塊状30%、10YR4/4(赤)質粘土塊状15%、10YR2/3(赤)質粘土塊状5%	軟、硬、炭化物片少量含む
埋土 E3	10YR3/3(暗)赤質粘土	10YR3/4(赤)質粘土塊状15%、10YR2/3(赤)質粘土塊状10%	中～軟、中～硬、炭化物片少量
埋土 F1	10YR2/3(赤)質粘土	10YR3/3(赤)質粘土塊状25%、10YR3/4(赤)質粘土塊状5%	中～軟、中～硬、炭化物片微量
埋土 F2	10YR3/4(赤)質粘土	10YR3/3(赤)質粘土塊状10%、10YR4/4(赤)質粘土塊状3%、10YR2/3(赤)質粘土塊状3%	軟、硬、炭化物片微量含む
埋土 F3	10YR2/3(赤)質粘土(粘性強)	10YR2/2(赤)質粘土塊状15%、10YR2/1(赤)質粘土塊状10%、10YR3/4(赤)質粘土(焼土)塊状10%	軟、硬、炭化物片中～多量、焼土粒少量含む。
埋土 F4	10YR3/4(暗)赤質粘土	10YR4/4(赤)質粘土塊状20%、10YR3/3(赤)質粘土塊状15%	軟、硬、炭化物片少量含む。
埋土 G1	10YR3/3(暗)赤質粘土	10YR2/2(赤)質粘土塊状5%、10YR4/4(赤)質粘土粒状15%、10YR2/3(赤)質粘土塊状20%	軟、硬
埋土 G2	10YR3/3(赤)質粘土	10YR4/4(赤)質粘土塊状10%、10YR3/4(赤)質粘土塊状15%	軟、硬、炭化物片微量含む。
埋土 G3	10YR2/3(赤)質粘土	10YR3/3(赤)質粘土塊状20%、10YR3/4(赤)質粘土塊状10%、10YR4/4(赤)質粘土塊状5%	軟、硬
埋土 H1	10YR2/3(暗)赤質粘土	10YR4/4(赤)質粘土塊状20%、10YR3/4(赤)質粘土塊状15%、10YR2/2(赤)質粘土塊状5%	軟、硬
埋土 H2	10YR3/3(赤)質粘土	10YR3/4(赤)質粘土粒状20%、10YR4/4(赤)質粘土粒状10%、10YR2/2(赤)質粘土粒状5%、10YR3/3(赤)質粘土粒状10%	中～軟、硬、炭化物少量、焼土粒少量含む。
埋土 H3	10YR3/3(赤)質粘土	10YR4/4(赤)質粘土塊状15%、10YR3/4(赤)質粘土塊状10%	軟、硬
埋土 H4	10YR3/4(赤)質粘土	10YR4/4(赤)質粘土塊状20%、10YR3/3(赤)質粘土塊状10%	軟、硬
埋土 K	10YR3/3(赤)質粘土	10YR2/3(赤)質粘土塊状15%、10YR3/4(赤)質粘土塊状10%、10YR4/4(赤)質粘土塊状3%	軟、中～硬、炭化物微量含む。
貼床 VIa	10YR6/8砂質粘土	10YR2/3(赤)質粘土粒状1%、10YR3/4(赤)質粘土粒状5%	硬、密、砂粒粒状小塊混入。
構築土 VIIb	10YR4/6砂質粘土	10YR2/2(赤)質粘土塊状1%、10YR5/8(赤)質粘土塊状7%、10YR6/8(砂)質粘土粒～塊状7%	中～硬、中～密、貼床類似層
構築土 VIIa	10YR3/4(明)赤質粘土	10YR2/2(赤)質粘土小塊状3%、10YR6/8(砂)質粘土小塊状5%	軟、中
構築土 VIIb	10YR3/4(赤)質粘土	10YR2/2(赤)質粘土塊状10%、10YR6/8(砂)質粘土塊状10%	軟、硬、雜量混入する。

第3表 竪穴住居跡土層観察表



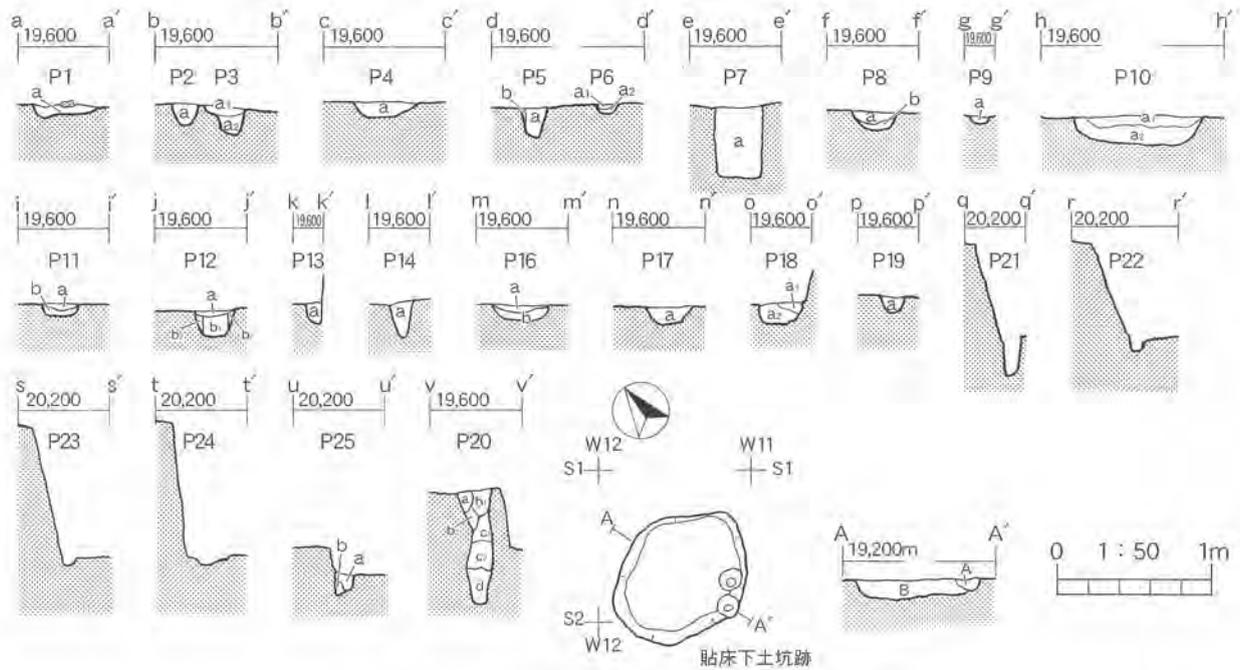
第5图 竖穴住居跡全体图



第6図 竪穴住居跡カマド跡

層名	基本土	混入土	備考
崩壊土 0	10YR4/3弱粘質土(粘質土)	10YR3/4弱粘質土塊状7%、10YR4/6弱粘質土塊状10% 10YR6/8弱粘質土塊状7%、5YR5/8弱粘質土粒状5%	中、中
袖構築土A	10YR6/8弱粘質土(粘質土)	10YR5/4弱粘質土塊状2%、10YR4/4弱粘質土塊状5% 5YR5/8弱粘質土粒状10%	硬、蜜
袖構築土B1	10YR5/6弱粘質土(粘質土)	10YR6/8弱粘質土塊状5%、5YR5/8弱粘質土粒状7%	硬、蜜
袖構築土B2	10YR5/6弱粘質土(粘質土)	10YR6/8弱粘質土塊状10%、5YR5/8弱粘質土粒状1%	中、中～蜜
かマ 埋土C1	10YR4/4弱粘質土(粘質土)	10YR6/6弱粘質土塊状7%、7.5YR5/8弱粘質土粒状15%	中、中、かマ 芯材襷振り形?
かマ 埋土C2	10YR6/8弱粘質土(粘質土)	10YR5/8弱粘質土塊状20%、10YR3/3弱粘質土塊状2% 7.5YR6/8塊土粒状2%	硬、中～蜜、かマ 芯材襷振り形?
かマ 埋土 D	10YR5/6弱粘質土(粘質土)	10YR4/6弱粘質土塊状1%、7.5YR4/6弱粘質土塊状1% 5YR6/8(明)弱粘質土粒状1%	中、中～蜜
かマ 埋土 E	10YR5/6弱粘質土(粘質土)	10YR6/8弱粘質土塊状20%、10YR4/4弱粘質土塊状1%	硬、中～蜜
燃焼部焼土F1	2.5YR5/6弱粘質土	10YR5/6弱粘質土塊状2%	硬、蜜
燃焼部焼土F2	5YR5/8弱粘質土	10YR5/6弱粘質土塊状1%、10YR5/4弱粘質土塊状1%	中～硬、中～蜜
煙道部埋土 G	10YR4/4弱粘質土	10YR3/2弱粘質土塊状25%、10YR5/6弱粘質土塊状10% 10YR6/8弱粘質土塊状7%	中、中
煙道部埋土 H	10YR4/6弱粘質土	10YR5/6弱粘質土塊状15%、10YR4/4弱粘質土塊状1%	中、中～蜜

第4表 竪穴住居跡カマド土層観察表



第7図 竪穴住居跡床面ピット断面図、貼床下土坑跡

層名	基本土	混入土	備考
埋土 P1 a	10YR4/6砂質埴土(粘質土)	10YR6/8砂質埴土粒状3%	中～硬、蜜
埋土 P2 a	10YR3/4砂質埴土(粘質土)	10YR4/6砂質埴土塊状10%、10YR6/8砂質埴土粒1%	軟、疎、炭化物片微量含む。
埋土 P3 a	10YR3/3砂質埴土		
埋土 P3 a ₂	10YR4/6砂質埴土(粘質土)	10YR3/4砂質埴土塊状5%	中～軟、中
埋土 P4 a	10YR3/3砂質埴土(粘質土)	10YR6/8砂質埴土塊状7%、10YR3/4砂質埴土塊状3%	軟、中
埋土 P5 a	10YR3/3砂質埴土(粘質土)	10YR6/8砂質埴土塊状1%	軟、中～疎
埋土 P5 b	10YR4/4砂質埴土(粘質土)	10YR5/8砂質埴土粒状3%、10YR6/8砂質埴土粒状5%	軟、疎
埋土 P6 a	10YR3/3砂質埴土(粘質土)		軟、疎
埋土 P6 a ₂	10YR5/6砂質埴土(粘質土)	10YR3/3砂質埴土塊状5%	軟、疎
埋土 P7 a	10YR3/4砂質埴土(粘質土)	10YR4/6砂質埴土塊状10%	軟、中
埋土 P8 a	10YR3/3砂質埴土(粘質土)	10YR4/6砂質埴土塊状15%	軟、中
埋土 P8 b	10YR5/6砂質埴土(粘質土)	10YR3/4砂質埴土塊状20%	軟、中
埋土 P9 a	10YR3/3砂質埴土(粘質土)	10YR6/8砂質埴土粒状1%	軟、中
埋土 P10a	10YR4/4砂質埴土(粘質土)	10YR3/3砂質埴土塊状5%	中、中～蜜、小鉄滓が微量混入する。
埋土 P10a ₂	10YR4/4砂質埴土(粘質土)	10YR4/6砂質埴土塊状5%、10YR3/4砂質埴土塊状15%	中～硬、中、小礫少量含む。
埋土 P11 a	10YR3/4砂質埴土(粘質土)	10YR4/6砂質埴土塊状5%	軟、中
埋土 P11 b	10YR5/6砂質埴土(粘質土)	10YR3/4砂質埴土塊状3%	中、中
埋土 P12	土層往記未記録		
埋土 P13 a	10YR3/3砂質埴土(粘質土)		軟、疎
埋土 P14 a	10YR3/3砂質埴土(粘質土)		軟、疎
埋土 P16 a	10YR3/4砂質埴土(粘質土)	10YR4/6砂質埴土塊状5%	軟、中
埋土 P16 b	10YR4/6砂質埴土(粘質土)	10YR3/3砂質埴土塊状5%、10YR5/8砂質埴土粒状3%	軟、中
埋土 P17 a	10YR3/4砂質埴土(粘質土)	10YR5/8砂質埴土粒状3%、10YR4/6砂質埴土粒状3%	軟、中
埋土 P18a	10YR4/6砂質埴土(粘質土)	10YR3/4砂質埴土塊状10%	中、中
埋土 P18a ₂	10YR3/3砂質埴土(粘質土)	10YR4/6砂質埴土塊状5%、10YR5/8砂質埴土粒状3%	中～軟、中
埋土 P19 a	10YR3/4砂質埴土(粘質土)	10YR5/8砂質埴土粒状3%	軟、中、微量の炭化物片含む。
埋土 P20 a	10YR4/4砂質埴土(粘質土)	10YR3/4砂質埴土粒状7%、10YR6/8砂質埴土粒状1%	中～軟、中
埋土 P20 b	10YR5/6砂質埴土(粘質土)	10YR4/4砂質埴土粒状5%、10YR6/8砂質埴土粒状10%、10YR7/8砂質埴土粒状1%	中、中～蜜
埋土 P20 b ₂	10YR4/6砂質埴土(粘質土)	10YR5/6砂質埴土塊状10%、10YR3/4砂質埴土粒状10%	中、中
埋土 P20 c	10YR4/6砂質埴土(粘質土)	10YR5/6砂質埴土塊状7%、10YR7/8砂質埴土粒状1%	中、中
埋土 P20 c ₂	10YR5/6砂質埴土(粘質土)	10YR5/8砂質埴土塊状30%、10YR3/4砂質埴土塊状7%	中～軟、中
埋土 P20 d	10YR3/4砂質埴土(粘質土)	10YR4/4砂質埴土塊状15%、10YR6/8砂質埴土粒状1%	中～軟、中
埋土 P25 a	10YR4/3砂質埴土(粘質土)	10YR3/3砂質埴土塊状7%、10YR7/8砂質埴土粒状7%	中、中
埋土 P25 b	10YR4/3砂質埴土(粘質土)	10YR3/2砂質埴土塊状10%	中、中
貼床下土坑 A	10YR5/3重埴土(粘質土)	10YR4/4(明)重埴土塊状10%	軟、疎(P5の掘り残し?)
貼床下土坑 B	10YR5/8重埴土(粘質土)	10YR3/2重埴土粒～塊状1%、10YR3/3重埴土塊状1%	中～軟、中

第5表 竪穴住居跡床面ピット、貼床下土坑跡土層観察表

第1号炉跡と鉄滓廃棄層（第8図）

竪穴住居跡の埋没途中に作られている。およそ半分は調査区外となり全容は不明で、製鉄のどの段階に相当するものかは断定できなかった。調査段階では鍛造剥片（ハンマースケール）などは確認されていない。

平面形

平面形は楕円形状を呈するものと推測され、規模は長軸で1.2mをはかる。炉底から上部構造は破壊されており、僅かに炉壁の基底部分（I 1層）と思われる一部が残存しているだけであった。

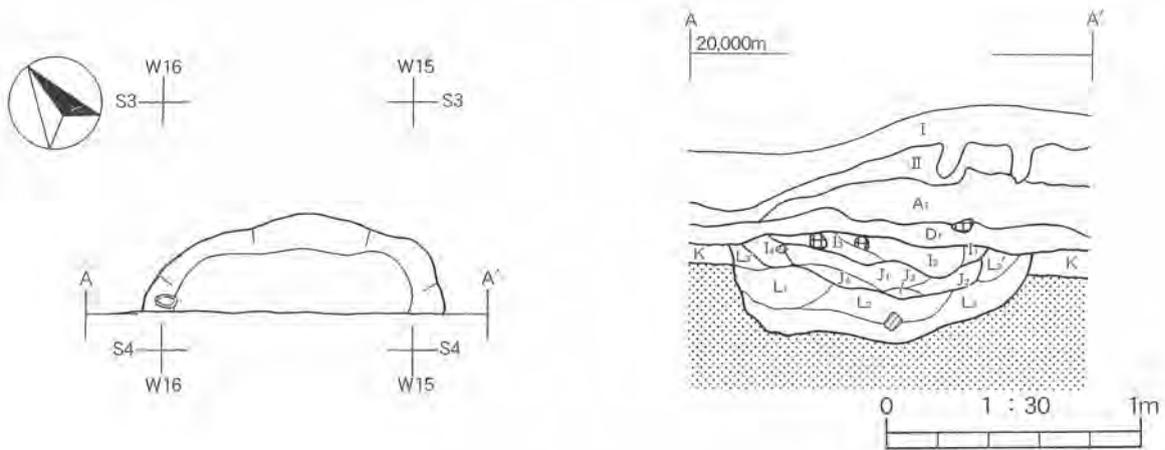
埋土

I 2層からJ 4層はその後の埋土で、多量の鉄滓や焼土塊、炭化物片が混入している他、炉壁か炉の基底部分と思われる細かい破片の混入が見られる。また、I 2層からフィゴの羽口片1点が出土している。L層は下部構造、炉穴の掘り形に相当するものと思われる。鉄滓の出土量は14,380gで、そのうち鉄分の含有を調べるメタルチェッカーに反応した鉄塊系遺物は1,080gであった。

鉄滓廃棄層

大量の鉄滓を含む廃棄層（D₁層）は、この第1号炉跡を覆うように東側から堆積しているが、竪穴住居跡の西壁側までは到達していない。このことから、第1号炉での作業が終了ないしはほぼ同時期に調査区外の南から東側で鉄に関連した作業を行った何らかの遺構の存在が推測される。また、廃棄層の中でも竪穴住居跡の東壁側のところで鉄滓とともにまとまった砂鉄の塊を検出している。以下、今回の調査で確認された鉄滓についての各層毎の出土量、メタルチェッカーに反応した鉄塊系遺物の量などの一覧表を次ページに掲載した。

遺物は、多量の鉄滓のほか炉壁か、もしくは炉の基底部分の細かい破片及び、フィゴの羽口片が6点出土しており、このうち4点を図示した。（第11図）いずれも先端部にスラグ様の付着物が認められ、胎土には細かい白い粒を含む。外面の網点は灰色に変色している部分を示している。第11図1、2、4は外面にヘラナデ調整痕がみられ、1は内径3.3cm、外径9.35cm、2は内径2.8cm、外径9.2cm、3は破片で推定で内径2.7cm、外径8.3cm、4は内径2.7cm、外径9.7cmをはかる。



第8図 第1号炉跡

層名	基本土	混入土	備考
構築土I1	10YR2/3砂質壤土	2.5YR4/2砂質壤土塊状20%、10YR4/6砂壤土塊状20%	軟、中～疎、炉壁の基底部か。
埋土 I2	10YR2/2砂質壤土	10YR2/3砂質壤土塊状15%、10YR3/3砂質壤土塊状10%	軟、疎、塵、焼土粒多量、炭化物片少量混入する。
埋土 I3	10YR2/2(暗)砂質壤土	10YR2/3砂質壤土塊状5%	硬、中、鉄滓多量に含みI3層の主体となる。
埋土 I4	10YR2/3砂質壤土	2.5YR4/2砂質壤土塊状10%、7.5YR4/6砂質壤土塊状5%	中、中～疎、鉄滓・焼土粒多量を含む。
埋土 J1	10YR2/2(暗)砂質壤土	10YR2/1砂質壤土塊状20%、10YR2/3砂質壤土塊状15%	硬、中、鉄滓・炭化物片多量を含む。
埋土 J2	10YR2/1砂質壤土	10YR2/2砂質壤土塊状10%、10YR2/3砂質壤土塊状5%	軟、疎、炭化物片多量、鉄滓微量含む。
埋土 J3	10YR3/4(暗)砂質壤土	10YR4/4砂質壤土塊状20%	軟、疎
埋土 J4	7.5YR3/4砂質壤土	7.5YR3/3砂質壤土塊状10%、10YR2/2砂質壤土塊状10%	中～軟、中～疎、鉄滓中量・炭化物片少量含む。
構築土L1	10YR4/6粘質壤土(粘性強)	10YR4/4粘質壤土塊状15%、10YR3/4粘質壤土塊状10%	中、疎
構築土L2	10YR3/4粘質壤土	10YR4/4粘質壤土塊状20%、10YR4/6粘質壤土塊状10%	軟、中～疎、炭化物片微量含む。
構築土L3	10YR3/4粘質壤土	10YR4/6粘質壤土塊状20%、10YR2/2粘質壤土塊状10% 10YR6/8粘質壤土塊状20%	中、中、炭化物片微量含む。
構築土L3'	10YR3/4粘質壤土	10YR2/3粘質壤土塊状10%	中～軟、中、炭化物片微量含む。

第6表 第1号炉跡土層観察表

鉄滓反応度(単位はg表示)					
層名	N	L	M	H	計
I層	1,785	10	0	0	1,795
II層、IIIa層	7,295	225	0	0	7,520
竪穴住居跡埋土A層、B層	24,025	745	0	0	24,770
竪穴住居跡埋土層不明	9,780	240	0	0	10,020
竪穴住居跡埋土D層(鉄滓廃棄層)	45,545	775	0	0	46,320
第1号炉跡I2層～J4層	13,300	1,080	0	0	14,380
竪穴住居跡埋土E、F層、K層	2,545	215	0	0	2,760
出土層不明	455	0	0	0	455
合計	104,730	3,290	0	0	108,020

N、L、M、Hは鉄滓に含まれる金属の残留度合いを示す

Nは金属鉄を含まない

Lは低感度でやや大きな金属鉄を残留する

Mは標準感度でごく一般の金属鉄を残留する

Hは高感度で小さな金属鉄を残留する

第7表 鉄滓分析一覧表

層名	基本土	混入土	備考
1号土坑埋土a	10YR2/2粘質壤土	10YR4/4粘質壤土塊状1%	中～硬、中、炭化物片微量含む。
1号土坑埋土b	10YR3/4粘質壤土	10YR4/4粘質壤土塊状20%、10YR2/2粘質壤土粒2%	軟、疎、炭化物片微量含む。
2号土坑埋土a	10YR2/3粘質壤土(粘質土)	10YR3/3粘質壤土塊状7%、10YR7/8砂質壤土粒5% 10YR2/2粘質壤土塊状7%	中～軟、中、炭化物片微量含む。
2号土坑埋土b	10YR4/3粘質壤土(粘質土)	10YR5/8粘質壤土塊状5%、10YR6/8(暗)粘質壤土塊状2% 10YR6/8粘質壤土塊状7%、10YR2/1粘質壤土塊状10%	中～軟、中、炭化物片微量含む。

第8表 第1号、第2号土坑跡土層観察表

第1号土坑跡

第1号土坑跡 (第9図)

調査区のほぼ中央、竪穴住居跡の南西側に位置する。約半分以上は調査区外となる。平面形は楕円形状を呈するものと推測される。0.75×0.3m以上をはかる。

埋土は2層に大別される。底面はほぼ平坦で壁は西側はほぼ直で東側はゆるくなる。遺物は出土していない。

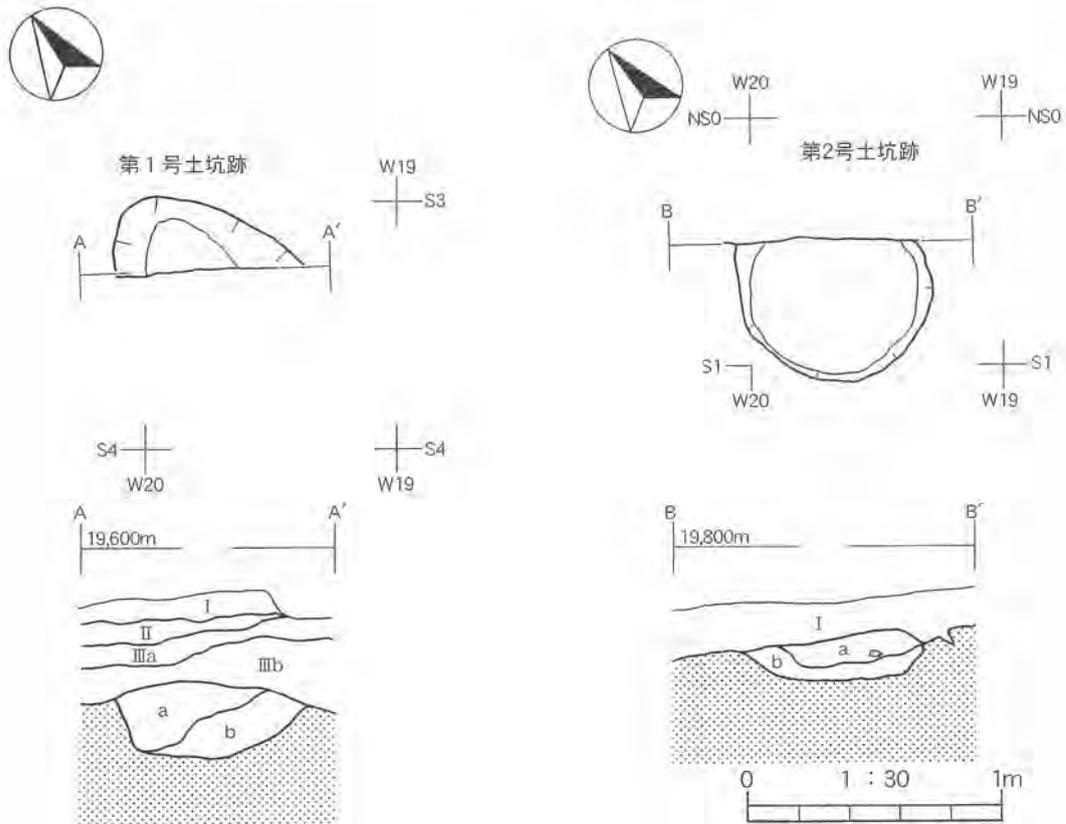
第2号土坑跡

第2号土坑跡 (第9図)

調査区のほぼ中央、竪穴住居跡の北西側に位置する。約4/3は調査区外となる。平面形は円形状を呈するものと推測される。径0.8mをはかる。

埋土は2層に大別される。底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は埋土から土師器甕の体部片が1点出土している。外面には刷毛目調整、内面には強いヘラナデ調整が施されている。胎土は緻密で焼成も良い。

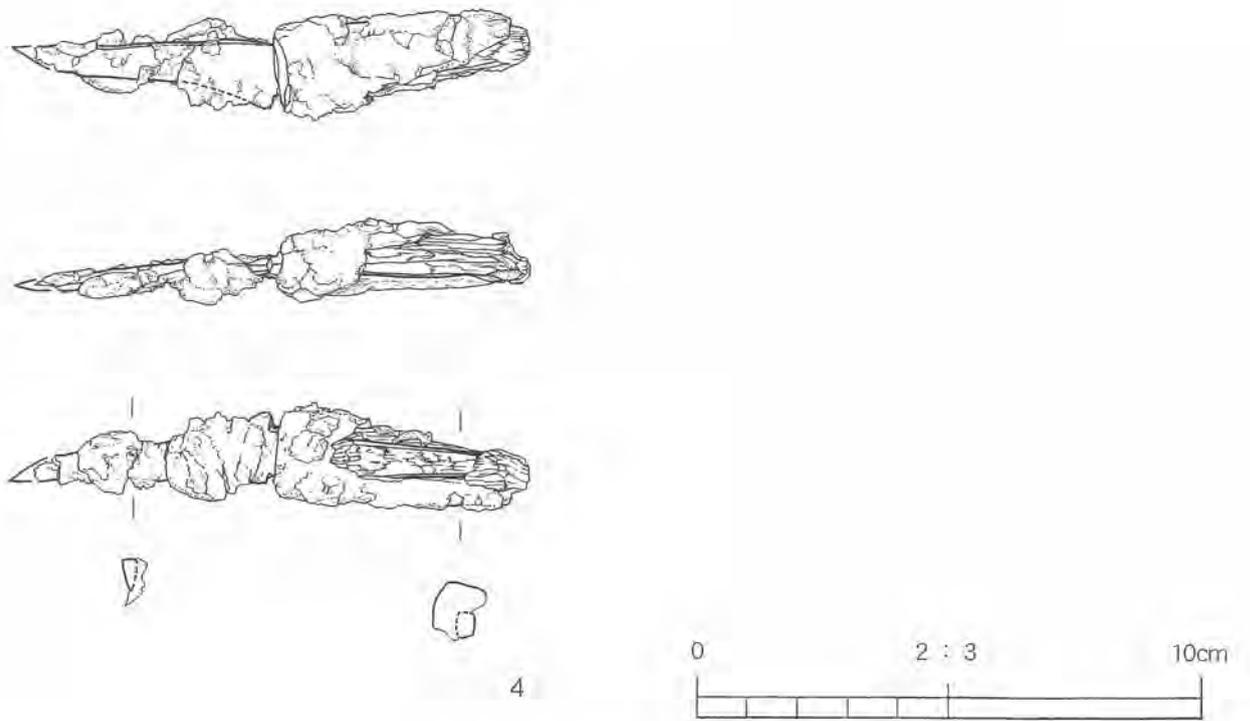
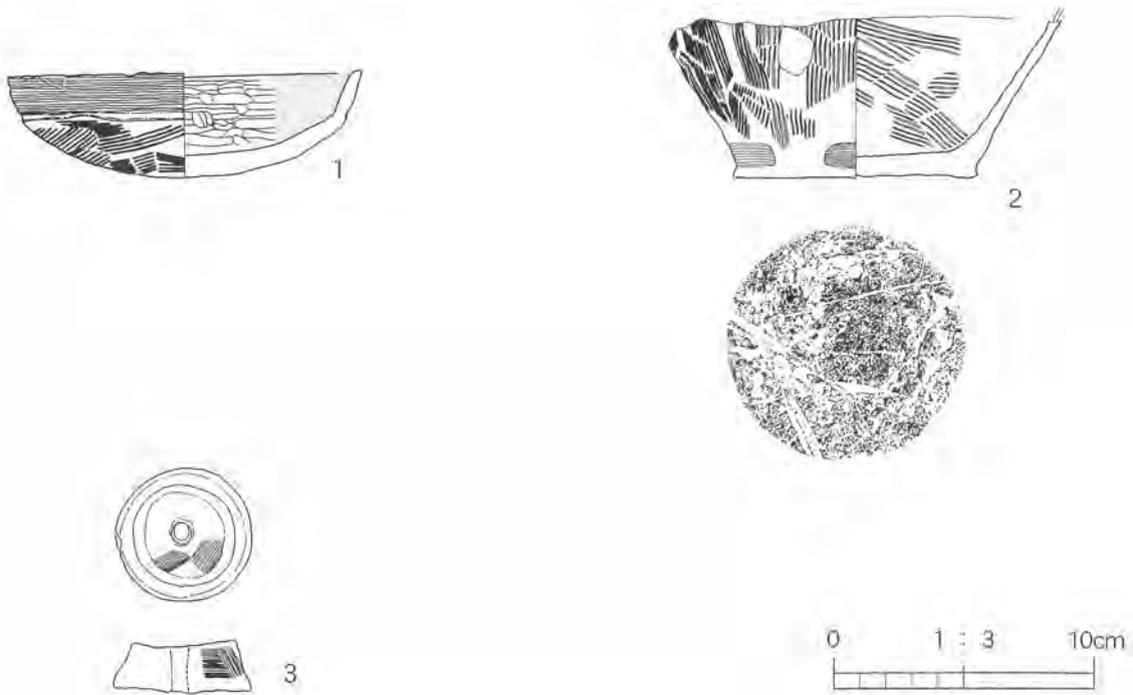


第9図 第1号、第2号土坑跡

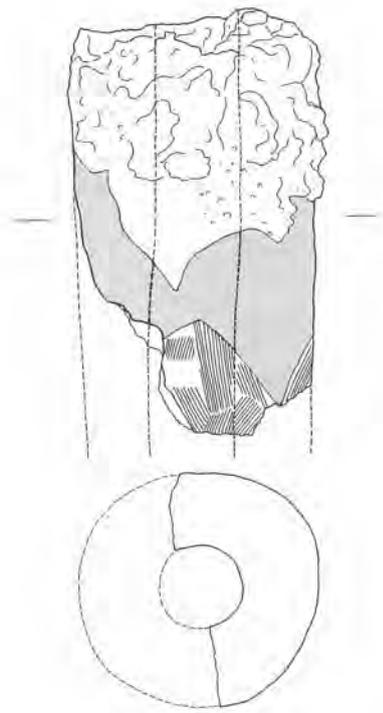
4. 遺構外出土遺物 (第11図)

縄文土器

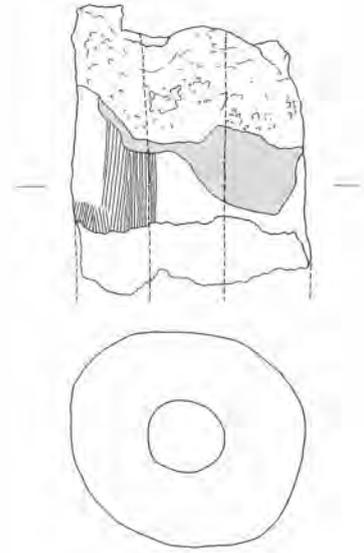
若干の縄文土器片が出土しているが、いずれも極小破片で時期を推定するのは困難なものである。層位的には基本層序I層及びIII層から出土している。第11図9は隆起線文を貼り付けている。その外は縄文のみの施文である。



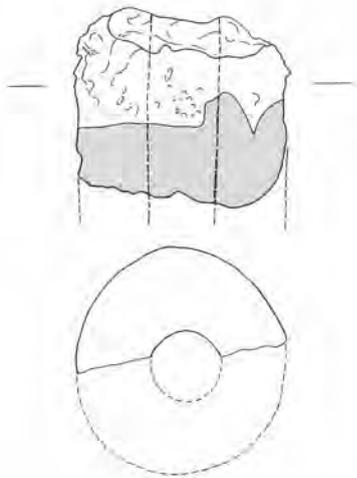
第10図 出土遺物①



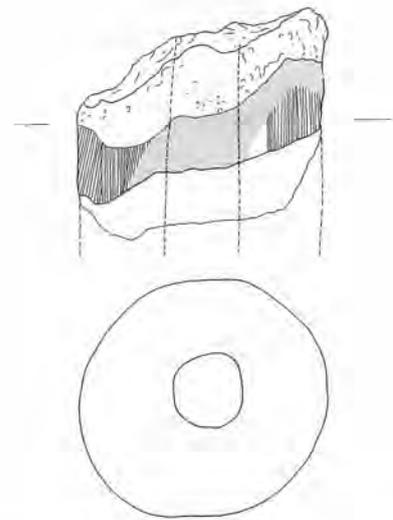
1



2



3



4



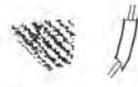
5 (遺構外出土)



6 (遺構外出土)



7 (遺構外出土)



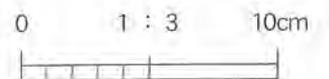
8 (遺構外出土)



9 (遺構外出土)



10 (竪穴埋土)



第11図 出土遺物②

IV 調査のまとめと考察

1. 遺構について

僅か120㎡という狭く限られた調査区の中で、竪穴住居跡1棟、炉跡1基、鉄滓廃棄層、土坑跡2基などの遺構が確認された。

竪穴住居跡はカマド内に置かれた土器から8世紀後半（奈良時代後半）に所属するもので、当該時期の竪穴住居跡としては、市内では狐崎、上村、弘川、鯉沢、赤前遺跡群（平成10年度報告予定）で調査されている。全掘できなかつたため平面形、規模などは正確には判明しないが、規模的には長軸方向で8.5m強をはかり今までに市内で調査された当該期のものとしては最大規模となるものである。しかし、柱穴などは調査区外と思われ全体の構造を把握できなかった。カマドは、北からやや西方向にずれるが、竪穴西壁のほぼ中央に位置しているものと思われる。本文中にも記したが、カマド燃焼部に土師器坏と甕を伏せた状態で、しかもその内部には礫が入っていた（第5写真図版）。カマドの焼台として使用されていたと考えるのが妥当と思われ、内部の礫は焼台としたときの重みに耐えるために入れられたものであろう。このような事例は市内の遺跡では、弘川Ⅰ遺跡の第2号竪穴住居跡で土師器坏（2個重ねている状態）と甕を伏せた状態で出土している。また、平成10年度に刊行予定の赤前Ⅲ遺跡の同時期の竪穴住居跡でも調査されているが、いずれも土器の内部には礫はない。今後類例を調べていきたい。

竪穴住居跡

次に第1号炉跡であるが、宮古地方では鉄に関連する遺構（大まかに分けて製練と鍛冶）が多い。『萩沢Ⅱ 93』に市内の概略がまとめられているが、本文中にも記したとおり今回調査した第1号炉跡がどの段階のものかは断定できなかったが、形態や下部構造に防湿施設を作っていないことや今までの調査事例等と突き合わせると鍛冶、それも小鍛冶段階の鍛冶炉の可能性が高いといえる。鍛造剥片が確認されていないという点に若干の疑問が生じるが、現地調査で持ち帰った土砂の分析が時間的な制約でできていないため、今後の分析で見つかる可能性もあることを書き添えておく。一方、逆に鉄滓廃棄層は流動滓が多く見られ、今回出土した鉄滓の全重量の約66%を占めている（竪穴住居A層、B層含む）。また、地形的に見ても製錬炉を検出している青猿Ⅰ（『青猿Ⅰ 88』）、萩沢Ⅱ遺跡に似ている点からも製練という段階の作業に伴った鉄滓廃棄層の可能性も考えられる。

第1号炉跡

鉄滓廃棄層

2. 遺物について

竪穴住居跡から奈良時代に所属する土器が出土しているが、量的にも本文中に記載したものがほとんどすべてであるため、ここではその土師器坏と甕についての年代観を示す程度に止めたい。坏は丸底で中位に段を有す内面黒色処理を施したものである。体部から口縁部にかけては直立気味に立ち上がる。また、甕は底部の端が張り出し器面調整に刷毛目調整を施している。このような坏と甕の組み合わせ、須恵器が相伴していない点は、鯉沢遺跡（『鯉沢 92』）の第Ⅱ期土器群に相当し8世紀半ばから後半に位置づけられるものと考えられる。

8世紀後半

第1号炉跡や鉄滓廃棄層から出土した大量の鉄滓や鉄塊系遺物、砂鉄塊、フィゴの羽口片は、

直接年代観を示す土器等が出土していないため、現段階ではその竪穴が埋没するまでの時間差がどれくらいかにより、その年代、時期を推定するしかない。洞状地形の端部に所在する竪穴住居跡の床面におよそ数cmから10cmくらいの土砂の堆積にかかる時間にはそれほど差があるとは考えにくいことから、竪穴住居跡の時期と極端にかけ離れた時期のものとは考えにくい。従って、これらの時期を8世紀後半頃と考えたとすれば、現段階で市内最古の、鉄に関連した遺構となる。

今回初めて調査された当遺跡は8世紀後半の集落、鉄に関連した文化のあり方を考えていく上では、閉伊川流域の同時期の集落との関連、更には宮古地方沿岸部の動向を探る上での資料のひとつになったと思う。

報告書抄録

ふりがな	ふじばたけいせき							
書名	藤畑遺跡							
副書名	平成9年度発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	52							
編著者名	工藤剛司、鎌田祐二							
編集機関	岩手県宮古市教育委員会							
所在地	〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° 〃	° 〃			
ふじばたけ 藤畑	いわてけん 岩手県 みやこし 宮古市 おれあまづかむ 大字津軽 いしだいじゅうにち 石第12地 わりあまづかむ 割字藤畑 あまじりつこうばん 32番地3	03202	LG53-2346	39° 34' 01"	141° 56' 41"	19970728 ~19971009	120	墓地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ふじばたけ 藤畑	集落	奈良	竪穴住居跡1棟 鍛冶炉と思われる炉跡1基 鉄滓廃棄層 土坑跡2基		奈良時代後半の土器、鉄製品(刀子?) 鉄滓、フイゴの羽口、砂鉄、 土製紡錘車			

写 真 图 版

第1写真図版



調査前の現況



調査区全景

第2写真図版



竪穴住居跡検出状況



竪穴住居跡完掘

第3写真図版



豎穴住居跡土層断面（北側）



豎穴住居跡土層断面（南側）

第4写真図版



竪穴住居跡カマド検出状況



竪穴住居跡カマド断面（東側）

第5写真図版



竪穴住居跡カマド煙道断面



竪穴住居跡カマド出土土器内部礫出土状況

第6写真図版



竪穴住居跡カマド完掘

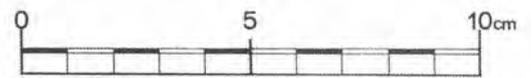
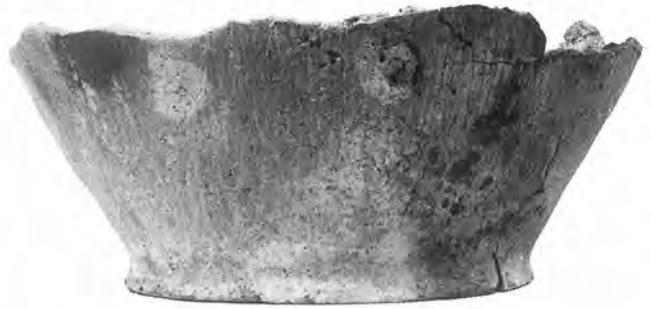


第1号炉跡断面

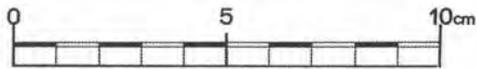
第7写真図版



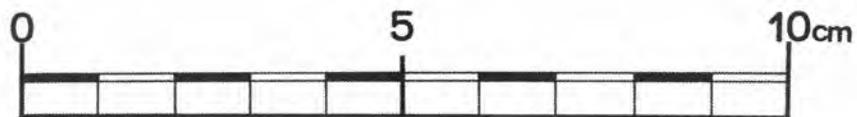
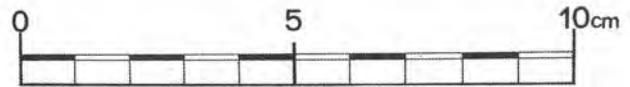
第10図 1



第10図 2



第10図 3



第10図 4

竪穴住居跡カマド周辺出土遺物

第8写真図版



第11図1



第11図2



第11図3



第11図4

鉄滓廃棄層出土フィゴの羽口



第11図5



第11図6



第11図7



第11図8

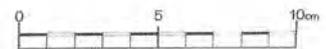


第11図9



第11図10

遺構外出土遺物他



宮古市埋蔵文化財調査報告書52

藤畑遺跡

— 平成9年度発掘調査報告書 —

1998. 3

発行 岩手県宮古市教育委員会
〒027-8501 宮古市新川町2番1号
TEL 0193-62-2111

印刷 株式会社 文化印刷
岩手県宮古市大通り2丁目5番2号
TEL 0193-64-3353

